

## 兄弟同窓

母校の七〇年史はそのまま昭和の歴史を投影しているといえる。同窓の数七〇〇〇有余名。私学の教育風土が十分に生かされ、幾多の人材が排出して夫々の分野で活躍している。

同窓はひとしく母校を愛し、終生の友垣を

なして交遊を深める。卒業生には、父子孫三代に亘る人もいと聞く。ましてや兄弟のそれは数え切れないほど。実に私学なればこそ醇風でありロマンと言えよう。

かく言う私達兄弟も昭和二八年から三七年

横田 英司 (新11回生)  
横田 雄司 (新14回生)

にかけて同じ門をくぐっていた。佐々木哲郎校長、山中順三校長の代である。

爾来三〇有余年、記念すべこの時に際会し、同腹同窓が共にオムニバスに乗り、我らが青春のAlma Materを語ることにした。

### 起承転結

チャボという鶏は見かけによらず気が強い。わが家のチャボも例外ではなかった。妻子を

守ろうと、鶏小屋に近づく猫に翼を広げて敢然と立向かうのである。

岩中にも「チャボ」という渾名の名物教師がおられた。淵沢行雄先生その人である。肩掛けカバンに国民服のいで立ちで汽車通勤。中風を患われたためか左腕が不自由だ。小柄な体軀ながら、なかなか利かん気なところがある。

授業中「君と私語をしていると、目ざとく見つけられ「オイ！ 横田、鑑賞とはどういう意味か？」と指差された。「ハイ！ 物事を味わうことかと思えます。」と答えると、何とも嬉しげにニッコリ肯かれたのには、妙な愛嬌を覚えた。

「大坂本町糸屋の娘、姉は一八、妹は一六。諸国諸大名は弓矢で殺す。糸屋の娘は目で殺す。」とは漢文授業中の挿話である。漢詩には「起承転結」の決まりがあり、これにより作意が明快になり、内容も引締まる。話しても同じことが言えると言われた。

このチャボ先生、体軀こそ小さかったが、日本敗れたりとはいえ、米国何するものそのの気概を持たれていた。「アメリカ毛唐、アメリカ毛唐」が常の口癖。

校内ではこの小さなチャボ先生が、校外にあつては米国人の大きなし先生が、共に好きな中学生であつた。

(英司記)

## ブラバン事始め！

昭和三四年のこと。皇太子ご成婚当日、盛岡市内の高校吹奏楽部員と盛鉄局合同によるパレードが挙行されたことを記憶している人は少ないだろう。まして、その中に発足まもない岩高吹奏楽部の生徒が最前列で行進していたことなど！

パレードといえ、今はバトントワライズを先頭にした華やかなものを連想するだろうが、当時はまだ戦争の名残があつた。髭親父（盛鉄局の指揮者）を先頭に、スポンにはゲートルを巻き、黒靴に学生服姿、さながら軍楽隊の行進であつた。

最前列はトロンボーン。訳はといえば、管をスライドさせる度に滲み出る唾が、前方に飛び散るためであつた。指揮する髭親父は唾が掛からないほどの間隔をもっているが、それでも行進中にはどうしても被ることになつた。それもその筈、練習中「楽器を下げて吹くな」と髭親父はしつこく注意する。上に向ければ、それだけ唾が前に飛ぶ。皮肉なことに、彼が濡れた分だけまともに演奏したということになるかもしれない。もつとも真面目さと未熟が吹いた結果として、同級の斎藤君と私が髭親父の加害者となつたようだ。

そもそもプラスチック部が発足したのは、



ブラバン発足当時の運動会で



プラスチック部行進



甲子園での応援に必要ということがきつかけである。坂出商業と熱闘した岩高だ、再び甲子園に行けるかもしれないと入部した年(中三)、早速、野球の応援をすることになった。しかし楽器の数が足りず演奏メンバーに入れない。何としても出たい私は、親に頼み修学旅行の代わりにトランペットを買ってもらい、無理やりメンバーの一員となった。中学生で高校野球の応援ができるのも私立校ならばこそである。行けなかった北海道は社会人となっても機会が無く、二〇年後に果すことが出来た。

一〇名足らずのメンバーで始めた吹奏楽部も今や、全国大会に出場するまでになったことを知り、またご成婚記念パレードを共にし、後に盛鉄に入られたクラリネットの名手藤原先輩が、折りに触れ後輩を指導していたと聞くにつけ、昔のブラバン仲間会いたくなる。それだけ歳月が過ぎ去ったことなのであろう。いつの日にか老若部員共々に甲子園で応援演奏する、そんな夢が実現すればと想うのである。

(雄司記)

## Face the music!

「日々三綱を銘記して鍛えたり、精神と技能、石椏の強きラガーには必勝の誓い堅し……」と歌われるラグビー部歌は若き日の山中順三

先生の作詞である。慶応英文卒の先生は映画の黒沢明監督と同級で、よくその話を聞かされた。先生のニックネームは「ベルシヤ猫」。由来は知らない。英語の授業中、質問に答えられないと「カボチャ頭」とからかわれた。

ところで年一回発行の「石椏」のことである。私も高校三年間、編集に携わった。校長である山中先生は必ず巻頭言を書かれ、一年

Face  
the music!  
i amana ka

山中順三校長の色紙(昭和31年)



ブラスバンドの初演奏(昭和33年)

の時に「Face the music!」、二年の時に「Fight it out!」、そして卒業時が「It's dogged does it!」を寄せられた。

スポーツなどの応援時に「fight! fight!」と叫ぶが、正確には「fight it out to the end!」で文字通り最後まで闘えということ。

また、スポーツでも勉強でも「It's dogged does it!」ブルドックのように噛み付いたら放すなを精神を持ての意だとか。はじめての「Face the music!」だけはすっかり忘れていた。カボチャ頭と皮肉られそう。

そこで久し振りに母校を訪ねることにした。西在家先生、池口先生のご協力により資料が難なく手に入り、それらを開るにつれて、往時のことがあれこれ甦り、しばし懐旧の思いに浸ることになった。

さて、その原意であるが「自らが起こした結果に対してはその報いを甘んじて受け、正々堂々と他からの批判を受止めること。」と辞書にはある。

この年の母校をめぐる状況はまことに厳しいものがあり、校長としての苦衷は大変なものであったらしい。しかしそんな時なればこそ「Face the music!」事態に堂々と立向い、批判に応えようと自他に戒められる指導者山中順三先生ならではのattitude(姿勢)とpride(矜持)が感じられる言葉なのである。

(英司記)